プロレタリア国際主義の旗高く

70年闘争の先頭へ

プロレタリア学生同盟結成宣言

1　世界資本主義の第四の危機、おそらくは、その最後の危機となるであろう60年代後半から70年代の"危機と激動の時代"に、われわれ、プロレタリア学生同盟は、みずからの歴史の第一歩を刻印せんとしている。

かつて、民主主義学生・同盟（左派）、学生社会主義者同盟、反戦学同に結集したわれわれは「構改左派」として自己定立し、みずからの綱領的実践的立場を厳しく自己点検しつつ、世界史的激動への突入を告げる現代の階級闘争を、日本学生運動において、先進的に闘いぬいてきた。われわれはいま、そのすべての歩みの総括のうえに、全党派性を賭けた飛躍をはかり、プロレタリア学生同盟として結晶させた。われわれは、日本階級闘争に世界史が与えた使命をみずからに課し、確実に果すことを決意し、ここにプロレタリア学生同盟の結成を宣言する。

ベトナム革命を突破口にし、それを底流にすえながら、激動の新たな時代の到来を告げ、プロレタリア世界革命の序曲を奏でている。"労働者の生産管理！生産の、社会の主人公"への強烈な志向性に貫ぬかれ、フランス全土を揺がした五月革命。現代最強の帝国主義権力の心臓部において噴出し、闘いつづける"ブラック・パワー"。アジア、アフリカ、ラテンアメリカにおいて熾烈な展開を見せる革命戦争。資本主義大学の階級性を鋭く暴露・告発し、それへの組み込みの拒否から、ブルジョア大学の解体、廃絶をめざす全世界的な先駆的学生運動の波等々……。明らかに歴史は、50年代から60年代前半にかけての世界の「安定的発展」―「ネオ・キャピタリズム神話」を崩壊せしめた。ドル危機を基底とし、ベトナム革命をその内実化のバネにした国際階級闘争は先進国危機と後進国危機を相互に結び合わせ、危機の世界性・同時性を全体的に突き出している。かかる今日の世界的危機の構造的連鎖は、先進国革命の可能性と現実性において、新たな様相で提起した。フランスの「五月革命」の『大学問題を発火点とする工場占拠＝自主管理闘争という社会的危機の広がり・ド・ゴールの強権的介入を契機とする政治的危機への拡大―インフレ経済機構上の発動によるゼネストの買い取りがよび起こしたプラン危機』、アメリカ帝国主義における『ベトナム危機―ドル危機―黒人問題』という危機の連鎖は、先進帝国主義における日の危機が、政治的・経済的・社会的支配機構を国独資体制の結び目とした有機的体系として支配構造の特質に媒介されて、政治的危機・経済的危機・社会的危機の複合的＝連続的発展性をもって展開されていることを示している。しかも、かかる危機の世界的展開構造は、資本主義世界体制の危機として現出しているだけではなく、同時に社会主義国における現状維持的"一国社会主義"的外交路線と官僚主義的国内体制の危機を誘発している。まさに、世界史は、その巨大な流れの中に、すべての国家・社会階級・階層をつみこみ、投げ入れながら、その合流地点へ確実に歩みを進めている。プロレタリア世界革命。そのインターナショナルな変革主体を生み出しながら。

2　七〇年安保闘争＝七〇年代階級闘争は、かつての帝国主義の世界的危機の深刻な特質につき動かされた日帝の帝国主義的支配構造を再編せんとする侵略的野望に対する真向からの対決と、して、国際階級闘争の重大な環を形成している。それは、七〇年代の世界史的過程に再編される、日米階級ブロックを粉砕し、日帝の階級支配の国際的支柱をマヒさせ、同時に安保推進下で進行する、帝国主義的国内階級支配の権力構造と全面対決し、日帝を世界革命の一環として打倒するための日本階級闘争の新たな地平を切り拓くことに他ならない。

かかるすぐれてプロレタリア国際主義的質をもつ七〇年闘争は、日帝との熾烈な階級攻防戦のなかで、日本階級闘争の歴史的放回軸としての重みを現実化し、社会主義革命の序曲としての激動と、それにふさわしい変革主体を先駆的に形成しつつある。

六八年―六九年初頭における東大・日大闘争を頂点に、全国学園闘争の激発と巨大なひろがりは、その内部で、七〇年安保―七〇年代階級闘争を担う変革主体を全共闘運動として表現した。安田解放講堂をめぐる二日間の攻防戦に凝集された東大頂点闘争は、明らかに全国学園闘争、いや、日本の学生運動の旋回軸であった。学生の日常意識の自己否定を媒介にして獲得されたプロレタリア意識性に支えられ、ブルジョア大学の否定から解体へ、帝国主義支配構造の根底的変革をめざす永続的闘争は大学危機―大学反乱として、体制変革的闘争へ転化させてゆく指導性をこそ問い返しておきたいていった。いまや、すべての学園闘争は、その課題における民主主義闘争としての性格にもかかわらず、闘いの永続的展開の中で、改良闘争としての自足に終ることなく、直接帝国主義支配構造の基本軸への攻撃的闘争へ転化させてゆく指導性をこそ問い返しており、そのようなものとして、学園闘争は七〇年安保構造闘争の不可欠の構成部分の位置を占めている。

二・四ゼネストにおいて、沖縄全軍労プロレタリアートが先駆的に示し本土の労働者反戦派が一歩一歩内実化しつつあるプロレタリア的質―自己の労働過程が、安保侵略構造に組み入れられているみずからの存在を賃労働者の自己存在を止揚する階級的立場においてとらえ、資本制的生産秩序そのものに対する非妥協的闘いは、階級としての労働者の固有の闘いの質を、プロレタリア・ヘゲモニーをつくりあげつつある。沖縄の基地プロレタリアートは、"ベトナム―沖縄―基地労働"の全体的連関のなかで、みずからの労働の社会的位置を自覚し、"基地労働者としての自己否定"の論理と思想をバネに、軍事基地の奴隷的存在から新らしい変革主体へ、その武器としてのストライキ闘争へと階級的ヘゲモニーを形成していったのである。

いま七〇年構造闘争は、七〇年安保推進下で進行する日常の政治的、軍事的かつ社会経済的再編に対する、独占ブルジョアジーの支配―強制―同意の体系の縦深的浸透を拒否する大衆的反撃のなかで、安保勝利の政治戦略的課題＝倒閣闘争の攻撃的質を全人民的に闘う革命的大衆行動によって実体化させる新たな変革主体の形成が内実化しつつある。

3　かつ帝国主義の世界的危機の深刻な特質につき動かされた日帝の帝国主義的支配構造を再編せんとする侵略的野望に対する真向からの対決として、国際階級闘争の重大な環を形成している。それは、七〇年代の世界史的過程に再編される、日米階級ブロックを粉砕し、日帝の階級支配の国際的支柱をマヒさせ、同時に安保推進下で進行する、帝国主義的国内階級支配の権力構造と全面対決し、日帝を世界革命の一環として打倒するための日本階級闘争の新たな地平を切り拓くことに他ならない。

かかるすぐれてプロレタリア国際主義的質をもつ七〇年闘争は、日帝との熾烈な階級攻防戦のなかで、日本階級闘争の歴史的放回軸としての重みを現実化し、社会主義革命の序曲としての激動と、それにふさわしい変革主体を先駆的に形成しつつある。

六八年―六九年初頭における東大・日大闘争を頂点に、全国学園闘争の激発と巨大なひろがりは、その内部で、七〇年安保―七〇年代階級闘争を担う変革主体を全共闘運動として表現した。安田解放講堂をめぐる二日間の攻防戦に凝集された東大頂点闘争は、明らかに全国学園闘争、いや、日本の学生運動の旋回軸であった。学生の日常意識の自己否定を媒介にして獲得されたプロレタリア意識性に支えられ、ブルジョア大学の否定から解体へ、帝国主義支配構造の根底的変革をめざす永続的闘争は大学危機―大学反乱として、体制変革的闘争へ転化させてゆく指導性をこそ問い返しておきたいていった。いまや、すべての学園闘争は、その課題における民主主義闘争としての性格にもかかわらず、闘いの永続的展開の中で、改良闘争としての自足に終ることなく、直接帝国主義支配構造の基本軸への攻撃的闘争へ転化させてゆく指導性をこそ問い返しており、そのようなものとして、学園闘争は七〇年安保構造闘争の不可欠の構成部分の位置を占めている。

二・四ゼネストにおいて、沖縄全軍労プロレタリアートが先駆的に示し本土の労働者反戦派が一歩一歩内実化しつつあるプロレタリア的質―自己の労働過程が、安保侵略構造に組み入れられているみずからの存在を賃労働者の自己存在を止揚する階級的立場においてとらえ、資本制的生産秩序そのものに対する非妥協的闘いは、階級としての労働者の固有の闘いの質を、プロレタリア・ヘゲモニーをつくりあげつつある。沖縄の基地プロレタリアートは、"ベトナム―沖縄―基地労働"の全体的連関のなかで、みずからの労働の社会的位置を自覚し、"基地労働者としての自己否定"の論理と思想をバネに、軍事基地の奴隷的存在から新らしい変革主体へ、その武器としてのストライキ闘争へと階級的ヘゲモニーを形成していったのである。

いま七〇年構造闘争は、七〇年安保推進下で進行する日常の政治的、軍事的かつ社会経済的再編に対する、独占ブルジョアジーの支配―強制―同意の体系の縦深的浸透を拒否する大衆的反撃のなかで、安保勝利の政治戦略的課題＝倒閣闘争の攻撃的質を全人民的に闘う革命的大衆行動によって実体化させる新たな変革主体の形成が内実化しつつある。

4　われわれは、かかる70年安保闘争前夜に、ある日本階級闘争の攻防戦の真只中に階級的大衆的学生同盟として、プロレタリア学生同盟を結成した。

われわれは、自治会共闘に結集し、それを支える部隊として70年安保闘争の要求するプロレタリア国際主義の質を追求し、大衆的行動部隊として実践してきた。

われわれは、東大・日大闘争が提起した今日の学園闘争の革命的内容を最もよく継承し首都において、関西において、岡山・島根において、全国においてその連続的波及力をつくりあげなかんずく京都大学において、「帝大解体」のスローガンの下、入試粉砕闘争を闘い抜き、安田解放講堂攻防戦につぐ、第二の全国的政治焦点を形成した。

われわれは、すべての政治実践のなかで、改良闘争から出発するすべての闘争に参加した多数の学友の意識変革を領導することに全力をそそいできた。われわれは行動するにあたって大衆を組織するにあたって、大衆にとって変革の思想は何であり運動はどの見地によりどのように応えうるかという問題を指導の普遍的原則としてきた。われわれは、改良と革命を彼我の深淵に切断し、大衆にとっての革命の思想をないがしろにしていう変革主体として、東大・沖縄闘争を、日本階級闘争の歴史的放回軸としての重みを現実化し、徹底的におしひろげ、前進させることこそ、われわれプロレタリア学生同盟は、危機の開示、いまだ革命を指導しうる前衛を形成し、運動の向自的再形成を担いうる真の指導部としていない日本階級闘争の現局面が要求するであろう。

教育の帝国主義的再編・七〇年予防反革命粉砕にむけて全国すべての全共闘運動をつくりあげ、全国闘争としての飛躍的発展であろう。

われわれは、四月沖縄闘争、六月愛知佐藤訪米へむけて、七〇年総力戦を闘い抜こうではないか。

すべての闘う先進的学友はプロレタリア学生同盟に結集せよ！

一九六九年　三月二十日

安保粉砕・沖縄奪還

4・28を突破口に政治・社会危機を激成せよ！

プロレタリア学生同盟政治局

結成大会で決意表明するプロ学同、茂山委員長

七〇年安保粉砕闘争の本格的第二波闘争＝四・二〇～四・二八沖縄闘争を目前にして、われわれは全国各地において戦闘態勢をうち固めるとともに、七〇年安保＝沖縄をめぐる情勢と、その闘う方向性を、再度鮮明に把握しなければならない。

1　七〇年安保闘争により四月～十一月闘争のもつ決定的比重は、第一に、沖縄の安保体制に有する位置であり、第二に、この政治過程が「沖縄問題」の"帝国主義的解決か、プロレタリア的解決か"の対抗的展開をその軸心に据えたことにある。

七〇年安保とは、ベトナム危機を推進力とする戦後世界体制の崩壊―「新世界体制」への移行をNATOと並ぶ二大軸として構成するものであり、帝国主義のアジア支配体制の全面的再編成の中心軸である。そして七〇年安保のこうした性格と位置を鮮明するものとして、その政治的・軍事的中心内容が、極東最大の核基地＝沖縄を、「安保体制」に組み入れる点にある。

七〇年安保は、"核基地"極東軍事体制の結節点たる沖縄の「日米共同防衛＝管理」体制への移行（その根底や内容がいかなるものであれ）を軸点とし、日米帝国主義の政治的＝軍事的地位＝その政治的表現たる日米軍事同盟を「アジア反共第二戦線」の戦略的結節点＝「管制高地」たらしめようとするものである。すなわち、七〇年安保は、"核基地"沖縄を日米軍事同盟に組み入れることを軸点に無制限の本土への核持ち込みを許容する「核軍事同盟」へ移行することである。それは、本土基地の沖縄基地（核基地）水準へのレベルアップも含めて、六〇年安保条約第六条の事前協議制を完全に廃止することを意味する。この「核軍事同盟」は、さらに自衛隊の核武装化によって補完される。

この「核軍事同盟」への公然たる移行目体が、日米軍事同盟の「アジア反共第二戦線」の管制高地への地位と役割の質的転化を意味するが、さらに以上の「現行安保」の"核安保"への転化の他に、沖縄を安保に組み入れることは次の事をも意味する。

沖縄は、現在米韓・米台・米比・アンザス（米・オーストリア・ニュージーランド）等の、アジアの軍事同盟の「共同防衛地域」＝結節点である。このアジアの多角的な反共軍事同盟の結節点たる沖縄を、安保の条約適用区域に組み入れることは「極東戦略体系の要石」沖縄を狭小にして、六〇年安保条約第五条の「日米共同作戦」区域を実質的にアジア全域に拡張することに他ならない。つまり、日米軍事同盟を、政治的・軍事的にもアジアの全地域への侵略作戦をなしうるような「アジア安保」へ転化させ、極東戦略体制全体の文字どおり「管制高地」へ移行させることである。

以上から明らかなように、七〇年安保の政治的・軍事的核心とは「沖縄問題」であり、「沖縄核基地」に他ならない。従って、七〇年安保体制確立へ向けての佐藤内閣の、最大の中心的具体的政治プログラムも"沖縄返還"を、いかにして帝国主義的に達成するかにある。

四月～十一月闘争の政治過程の七〇年安保闘争に有する地位の比重の大きさとは、とりもなおさず「安保強行突破」＝「沖縄解決」内閣としての佐藤が、自らの政治的基本課題を全面的に打ち出してきたことにある。

佐藤安保推進・沖縄帝国主義的「解決」内閣の七〇年コースは、次の諸点に集約される。

第一に、「予防反革命」的な事前弾圧として"労働者反戦派"活"全共闘派"に対する レッドパージ、また"全共闘派"に対する東大闘争にもっとも凝縮して示された軍事弾圧、「学生治安維持法（＝中教審答申）」などの大弾圧により、本格的闘争の大衆的爆発を事前に遮断することにある。

第二に、大型景気を七〇年まで持続させる財政政策を推進し、票田を配慮した財政散布を行なうことである。

第三に、危機の相互誘発を恐れ、労働者本隊の七〇年決起を恐れる彼らは、国家独占資本主義の経済的諸手段を駆使して、大型景気（ナザナキ景気）の安定成長を断ちきるとともに、七〇年闘争を、議会民主主義の枠内に再統合することをねらっている。佐藤は、「沖縄問題」とくらべ、相対的に有利な「大学問題」で、国会解散を遂行しようと策している。

この安保推進・沖縄帝国主義的「解決」内閣佐藤が、攻撃の矛先を向け、あるいは、相対的譲歩によって体制内につなぎとめようとしている対象は、そのまま七〇年安保闘争の立体的構造を構成する諸戦線に他ならない。この諸戦線とは、第一に、沖縄現地の闘いであり、第二に、本土の"労働者反戦派"＝学生に担われている沖縄安保闘争であり、第三に、東大、日大を頂点とする全国学園闘争であり、そして第四に"労働者反戦派"を左への推進力とする反合賃金闘争である。

四月闘争の重みとして、さらに指摘されべき点は、従来、相対的に独自に展開されていた、これらの諸闘争が、重複しあい、結合しあって展開されることとなる点である。

沖縄現地の闘いは、二・四闘争を起点として、教職員・官公労労働者を先頭として、祖国ナショナリズムを突破して、「基帰」闘争を前面に、本土の闘争を決定的に質的に柔軟に中間的に、ゲモニーの質の大きさ、四・二八闘争の一つである。

木曜手帖 (26)

（サ）ンシュユの花が散り、ハクモクレンの花が例年のように吹く風でいたみだしたとおもったら、棚のアケビが咲きはじめた。これは宮城と山形から移し植えたのだから、ミツバアケビという種類である。図鑑には暗紫色の小花弁と記されているが、夕日を受けて人目をひきつけるその花片の色は、けっして「暗」などいうものではない。すきとおったその紅紫色の小さなきらめきが、幼いころの思い出を、あふれださせてくれる。こういったほうがよい美しさなのだ。